

限界集落に希望

食生活ジャーナリスト大賞受賞

経営・森本ゼミ



限界集落の活性化に取り組む経営学部の森本祥一教授と森本ゼミ(27人)が、第1回食生活ジャーナリスト大賞に輝いた。同ゼミは2014年から新潟県南魚沼市の消滅の可能性がある限界集落「辻又集落」(15世帯人口約40人)で調査を行い、地元産コシヒカリの首都圏での販売やコマを利用した商品開発を次々と打ち出した。

その活動記録や住民との交流を昨年、『大学生、限界集落へ行く』……右から宮下さん、坂本さん、森本教授、贈呈者の小島正美JFJ代表幹事

限界集落の活性化に取り組む経営学部の森本祥一教授と森本ゼミ(27人)が、第1回食生活ジャーナリスト大賞に輝いた。同ゼミは2014年から新潟県南魚沼市の消滅の可能性がある限界集落「辻又集落」(15世帯人口約40人)で調査を行い、地元産コシヒカリの首都圏での販売やコマを利用した商品開発を次々と打ち出した。

4月25日に都内で行われた授賞式には森本教授とゼミ生代表の坂本聖真さん(4年次)、宮下太希さん(同)が出席。森本教授は「辻又での活動は実際に起きている課題に取り組みもので、学生が失敗を通して学びを深める貴重な場。辻又の方々には学生の力や大学の知を大いに使っても

「(専修大学出版局)として出版したい」とあいつつ、今後はコマのブランド化を目指し、活動に取り組む決意を示した。坂本さん、宮下さんも「活動は森本教授や先輩方が辻又の方々と一緒に築き上げてきたものだ。その土台を大切にしたい」とも地域を盛り立てていきたい」と宣言した。同賞は、食生活ジャーナリストの会(JFJ)が、食に関する情報発信や食育、食文化の継承の分野で優れた活動をしていく個人や団体に贈る。大賞はジャーナリズム部門、食文化部門の2部門がある。森本ゼミは食文化部門で受賞した。

フェンシング菊池さん 佐々木学長に優勝報告



胸には金メダル——菊池さんと佐々木学長

2016全日本選手権と2017ジュニア・カデ世界選手権のフェンシング女子フルールを制した菊池小巻さん(商3)が4月20日、佐々木重人学長と渡辺達朗商学部長に優勝を報告した。(12面参照)

全日本トップは専大生として25年ぶり。ジュニア・カデ世界選手権制覇は日本フェンシング女子史上初めての快挙。金メダルを手に喜びを語った菊池さん。佐々木学長から「次の目標は東京オリンピックですね?」と問われると、「はい」と、はにかむような笑顔で応えた。

両親ともフェンシングの選手で4歳から剣を握った。「スピード感の中で

ネット情報 認知症支援共同研究

オランダで成果発表

ネットワーク情報学部は川崎市、渋谷区、NPO法人、企業、大学(慶應義塾大、青山学院大、オランダ・デルフト工科大学)との連携事業として昨年4月にスタートした認知症の人の暮らしを支援するための共同研究に参加している。専大では「ピープルデザインプロジェクト」として、栗芝正臣准教授、佐藤慶一准教授、須藤シンジ非常勤講師の指導で3年次生だった21人がモノやサービスを提案。今年2月、デルフト工大で成果を発表した前場香里さん(4年次)に聞いた。



製作した「質問ブック」について発表する前場さん(左)と堀内さん

「デルフトは首都アムステルダムから電車で約1時間。デルフト工大はオランダで最も古い工科大学で、私たちが発表した校舎は意匠を凝らしたデザインがすてきでした。オランダでは、街で

もキャンパス内でも自転車が目立ちました」

認知症ケア先進国といわれるオランダのデルフト工大と交流することで、国内での取り組みの参考にしている狙いだ。専大からは前場さんら学生8人と指導教員が渡蘭。前場さんは堀内水葵さん(4年次)とともに「祖父母の思い出を孫が書き留める質問ブック」を発表した。

「コミュニケーションのきっかけになればいい、提案したのが質問ブックです。『入学式の思い出は』『家族との一番の思い出は』など、季節や家族にまつわる質問を載せ、その答えを書き込



デルフト工科大学での発表会の参加者

めるようにしています。似たプロジェクトをデルフト工大でも展開してほしいという思いが、うれしかった」

「コミュニケーションのきっかけになればいい、提案したのが質問ブックです。『入学式の思い出は』『家族との一番の思い出は』など、季節や家族にまつわる質問を載せ、その答えを書き込めるようにしています。似たプロジェクトをデルフト工大でも展開してほしいという思いが、うれしかった」

発表後は「デザインが日本らしくてかわいい」との意見があり、うれしかった

「デルフト工大の学生

もユニークなアイデアをたくさん発表しました。海外の学生の発表を聞く機会はなかなかありません。そこで直接質疑や討論することはとても刺激的でした。同世代の学生の考えに触れ、どうしてそんな発想が生まれるのか、興味深く感じました。海外での発表は初めてです。英語は自信がなかったけれどメンバーと一緒に猛特訓しました。最初は緊張しましたが、ホットドッグランチ、夕食のピザパーティーで学生同士打ち解け、楽しい時間を過ごせました」

専大の「ピープルデザインプロジェクト」では6チームが徘徊通報システムなどを提案。

2年目の今年度は新たに3年次生が加わり4年次生6人が継続。前場さんは質問ブックの改良に取り組む。

「ピープルデザインとは、さまざまな違いに対する意識のバリアを解消し、人々の生活を支えるため、クリエイティブに『寄り添って』いるモノを作っていくことであると考えます。当初は福祉にあまり関心がありませんでした。活動を通して介護や認知症、障がいなどを身近に感じられるようになりました。その中でデザインをどのように生かせるか考えていきたいという思いは膨らんでいます」

公開講座情報

第164回国際交流特別講演会「やさしい英語による経済学講座」

経済学部海外客員教授 アンジェルス・ペレグリニ氏(スペイン・バルセロナ大学)が5回連続講演。講演内容は「欧州連合(EU)・同一性から多様性へ」など。

▽日時 5月27日(6月24日の毎週土曜日) 13時~14時30分(会場) 国際交流会館山田長満インテリナショナルホール

※Eメールで事前申し込みが必要

▽日時 6月24日(土) 13時30分~15時30分(場



外国語のススメ 外国語教育研究室

- 56 -

ドイツ語

寺尾 格 経済学部教授

憲法に注目が向けられている。国の政府に対して憲法違反の論議が湧き起こるとは、一種の異常事態だろう。ヒトラー独裁による悲惨な記憶を意識した戦後のドイツ連邦共和国憲法は、特に第1条第1項の冒頭部分が、例えば難民問題などのさまざまな社会問題への対応などに際して、ほとんど決まり文句のごとくに繰り返されている。すなわち「人間の尊厳は不可侵である」。

ドイツ連邦共和国 基本法第1条第1項

この「尊厳」と訳される言葉はドイツ語のWürde(ヴェルデ)で、「価値」と訳されるWert(ヴェルト)と、語源的な類縁関係がある。「価値」が経済的な意味であるのに対して、「尊厳」

は「人間的な価値」と言い換えることができる。経済的な価値を測るのが「価格」という貨幣価値であり、これによってあらゆる物が比較可能となる。すなわち月給30万円よりも、40万円の方が「価値が高い」。

しかし経済的な価値とは異なる「価値」が、人間には存在するのではないかと。すべてを同質化するのでは押し量れない、ひとりひとりに固有の、つまり自分だけが持つ本源的な価値に目を向けるとすれば、別の言葉で表現するしかない。そこで「人間的な価値」である「尊厳」の出番である。

ドイツでは「基本法(Grundgesetz)」という。さまざまな社会問題を議論する際の共通の「土台(Grund=ground)」が、第1条第1項の「人間の尊厳」は、誰もが触れることのできないほどに大切な「人間的な価値」なのである。

我々の複雑な社会問題を考える際には、まず共通の「原則=土台」を確認しようという態度は、その場その場で適当にお茶を濁す「失言」を繰り返すのとは対極的な姿勢だろう。

(外国語教育研究室長) ※短縮版。全文はCALL教室ホームページで

訃報



泉久雄氏(いずみ ひさお)名誉教授・元法学部教授

4月29日、89歳で死去。1954年から99年まで在職。専門は親族法・相続法。